

リリヤン

皆川美恵子

リリヤンの糸が生れ、この糸を編む遊びが広まった昭和初期の時代は、吉屋信子の活躍した時代でもあった。『花物語』を手にした少女は、その子ども時代にリリヤンの遊びに興じていたのである。女の子の手遊びリリヤンをとりあげるにあたり、吉屋信子の香りを添えてここにとどける次第である。

白きふくよかな手をせし幼女の、紅き糸を指に絡めて、無器用ながらも健気に、初めて編み進みし手芸、そはリ、リヤンか。

早春の緑やわらかな草叢に、朝露含みし蜘蛛の巣のレースにも似て、五つの金の釘を色糸めぐりぐり、やがてかのレースは中の孔より糸紐となりて垂れ下がりにゆく。

リ、リヤン、リ、リヤン、幼き日、手すさびに糸をかけしリ、リヤンよ。いつしか真顔となりて円き環のまわりを編みゆきしリ、リヤンよ。女子の双のひとみは、かくも幼き時より、行きつそして元に戻りつまわる、小さな円き世界を飽かず見つめていたのか。

◆母と子

風糸、独染の紐、リリヤンと、玩具用の糸類を専門に商う伊藤商店は、祖父映貞氏が浅草の三筋町に店を興し、戦後になって現在の地、浅草橋に店舗を移した。手芸玩具リリヤンを扱う老舗として、市場の大半は卸すというこの店を、蔵前に向って玩具問屋のたち並ぶ江戸通りを行き、左手にそれて横道をしばらく進むと、右手に見つけることができる。店はガラス戸が開け放たれ、三和土の向うが、腰を下ろして算盤を入れながら商談をするといった風情の、あの畳座敷であった。いかにも老舗らしい風格を備えた

店の上方正面には、屋号の看板が掲げられ、その看板には、「伊藤隆夫商店」という字が新たな字の下にうつすら読み取ることができた。

さて隆夫氏というのは、現在の当主秀文さんの父親であり、世の中が落ち着いた昭和二十五年に、店を浅草橋に新たに構え、商売を再開させたものの、口惜しくもガンにより三十四歳という若さで世を去ってしまったとのこと。かくて、母親良子さんがいい知れぬ悲しみを胸に秘め、身じろぐ暇もなく店を守り続け、わが子の成長をいやまして心染しみに待ったのだった。今ようやく秀文さんという若い主人を得て、「株式会社イトウ」は「伊藤隆夫商店」の看板の上に色濃く書き加えられることとなった。

隆夫氏は昭和二十九年に逝き、息子に先立たれた映貞氏も昭和三十五年七十三歳で亡くなり、リリヤン手芸の玩具の起りのいきさつは、雪上の足跡を追うに似て、幾多の春がめぐり来たった後では、もはや尋ねることがかなわなかった。そこで良子さん秀文さんの母子に、まずは知っているかぎりのことをお話し願ひ、探索の糸口とすることにした。

リリヤンという場合、色糸のことをそう呼んだり、色糸を含めた編む道具いっさいを呼んだりする。厳密にはヤーン (Yarn) が

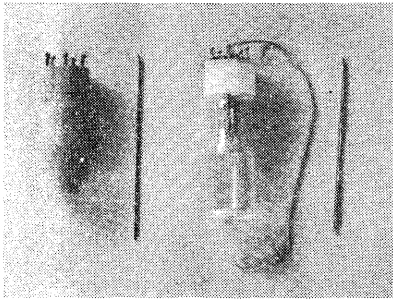
編み糸という意味なので、色糸を呼ぶのにふさわしいのだからけれど、糸を編む道具も、糸を編んでゆく遊びの総称としても、子どもたちはこの「リリヤン」の言葉をあてていたと思う。商店ではさすがにそれでは困るので、色糸を「リリヤン」、編む道具を「ニッチング」と呼び、糸・ニッチング・編み針の一式を「リリヤン手芸セット」と名づけて商っている。

リリヤンの糸、これは現在、その多くが京都で織られ、染められており、材質はレーヨン、つまり人絹とのこと。伊藤商店では京都の植村さんから色糸を5kgの原反のまとまりで仕入れ、尺五の糸巻の木枠に八回巻いた長さの小総にし、小売価格二十円で売っている。

リリヤンの色には十色あり、それぞれを桜、水、鬱金、青竹、黄色、鴉、紫、若草、赤、晒と呼び習わしている。またこのような丸染の他に、三色で染め分けた段染の糸がある。この段染の糸こそは、赤は晒の白に映えます赤く、白を置いた向うの黄色はあくまで黄色く、おのが色を輝くばかりに鮮かに主張した、幼き日の、宝物にもまごう美しい色糸である。編むごとに、糸を繰るごとに変わる、その濃い薄いの移り。ぼかし染のなかとけて夢に入り、なかば現の幻に揺れし一筋のリリヤン——そのリリヤンに魅せられた小さき心は、その昔どこを廻っていたのだろうか。

握るのに適した形の糸を編む道具「ニッチング」は、勿論 knitting の訛ったものである。昔前は木でできていたが、今は透明なスチロール樹脂となっている。良子さんの話によると、木のニッチングは扉の握りやテレビの足などを作っていた挽物屋さん、ロクロで一つ一つ挽いてももらったのだという。木材は多分一番安いものだったのでしようということで、はつきりしないが、単価の安いおもちゃを手で作っていくのが、しだいに挽物屋さんの方でもあわなくなっていくらしい。

昭和四十年頃に、はじめ不透明なプラスチックに替え、次には透明で編めたものが見えるスチロールにしたという。形は木のニッチングと同じ形で、釘も五本丸く並んでいる。スチロールのニッチングは、現在小売価格が三十円。このニッチング月に六万個、季節的には九月、十月がよく売れ、年間では、百万個が出るという。リリヤンの遊びは、幼い少女の小さな手にしっかり握られながら、やさしく、ひそやかに



今にまで続いているのだ。

さて幸いなことに、店の昔を知る人が見つかった。芦沢三千男（大正六年生れ）さんで、良子さんの叔父さんにあたる。芦沢さんは、昭和六年から十年程、伊藤商店に勤めていたという。その頃店では盛んにリリヤンのおもちゃを商っていたので、昭和四、五年にはすでにあったことが確かだと語った。当時、糸は東京の西多商店、旭興さん、八王子の福井商店から仕入れ、店の者が自分で染めて売ったという。段染もまず白くさらし、ゴムを巻いて、黄色ならオーラミン、牡丹色ならロードミンで染め分けていった。京都から糸を取り寄せ出したのはどうやら戦後のことのようにだ。リリヤンの最盛期は昭和七、八年から十五、六年で、戦後になり少しまた流行したものの、それからは横這いといえるとのことだった。

◆ 白百合

伊藤秀文さんは、業界でこういう本が出ましてと、一冊の本を取り出した。それは全京都組紐連合会より出版された『京くみひも』というクロス装の本で、葉のひもが五色で織りなされたくみ

ひもであった。その本の第六章には、「リリーヤーン業界について」という項があり、リリーヤーンの名称のおこりが、池田兵三郎商店の自社の製品の登録商店名から広まったと書かれていた。

本の著者は、リリーヤーンの歴史を植村義三郎（明治二十六年生れ）さんに尋ね記しているが、それによると、大正の初め京都で初めてリリーヤーンを作り、それを「八千代」と呼んで市場に出したということである。「八千代」という名称は、一本の糸が丸く細くメリヤス編みされ、ほぐすとどこまでもほどける糸という意味でつけられた由。

なお著者は、別の意見として「小学館の大日本百科事典によると、リリーヤーン編糸をわが国で初めて作ったのは、大正一二年に京都であると記されている。」とつけ加えている。

伊藤商店が取引をしているのは、京都の植村さんであった。そこで、玩具のリリヤンのおこりをさぐる次の手がかりとして、植村さんに池田兵三郎商店の所在を問い合わせることにした。

その結果、東京日本橋馬喰町の、現在は旭興株式会社が池田商店とわかり、旭興株式会社をお尋ねして、七十歳にえられる二代目の池田豊禎氏とよのりに、リリーヤーンの歴史を伺ってみた。それによると……

池田兵三郎商店は明治四十四年、父兵三郎（一八七四——一九

六九）が今ある馬喰町で創業。関東大震災があった大正十二年の末に、京都の猪飼ぶかひさんという人が、父のところを訪れ、こんなひもができたが売ってくれないだろうかと持ってきた。メリヤス職人の猪飼さんが新しいひもの試みでいろいろいたずらをしている時にできあがった品らしい。そういうわけで、リリーヤーンの発案者は猪飼さんで、この人呼び、東京に工場を建てて生産にかかっていったと聞かされている。そして父が百合の花が好きなところから、その編み糸に登録商標リリー印をとり、リリー印の糸即ちリリーヤーン（Lily-yan）という名称で販売した。レットルに印刷されたリリー印は、百合の花が二つ重なった図案だった。

百科事典の大正十二年説は、池田さんの証言と一致する。先の植村説と池田説では、年代に少しい違いはあるが、発生地が京都のメリヤス工場ということは同じである。以前からメリヤスは三本の糸、八本の糸、十六本の糸と、何本かの糸で編まれ、太い編みひもが作られていた。しかし一本の糸でメリヤス編みされるようになった細いリリーヤーンのひもは、目方が軽くふっくらして、柔軟性に富んでいた。材料がかららず安くできることもあり、そのしなやかな風合を生かして、何かに利用できないかと考えられはじめた。このようにまずリリーヤーンができあがってか

ら、リリーヤーンを売るために、その利用方法をさがしたのであった。

時代はまさに大正末期から昭和にかけての、洋風文化が中流階層に浸透をみる頃であった。マクラメレース、フランス刺繍、文化刺繍という種々の西欧手芸が、裁縫、押絵などにかわって、中流婦人の高雅な趣味として根づこうとしていた。これら手芸界の中に、しなやかにすべりこんでいったのがリリーヤーンであった。かたや東京で「リリーヤーン」と名づけられ、また、かたや京都で「八千代紐」と名づけられた編み糸——同じ編み糸につけられた二つの名ではあるが、時の人々は、「リリーヤーン」の音の響きをこそ受け入れたのであった。それは名にしおうリリーヤーンの、あえかにやさしき異国の響きゆえであつたらうか。

◆ピアノ

横浜の邦楽器工西川寅吉が、わが国第一号のピアノを完成させたのは明治二十年であった。続いて山葉寅楠が、そして大正から昭和にかけて、松本ピアノ、小野ピアノ、河合ピアノが創設され、たえなるピアノの響きを人々に贈りとどけ出した。芸術の魅力をいっばいに秘めたピアノは、都市の中流の家庭で、当時建てられ

出した文化住宅の応接間に凜然と置かれたのである。和風住宅に洋風の広間形式の応接間がついた文化住宅は、その応接間が玄関の横などに建てられ、赤や緑の色瓦のとんがり屋根がスツクと空にのび、出窓にはカーテンがなやかに垂れ下がっていた。

山の手郊外の黄昏時、半ば開かれた窓から洩れる、象牙の鍵盤からうち鳴らされるしらべは、まさに吉屋信子の少女小説の世界であつたらう。吉屋信子かの人は、この大正から昭和にかけての匂いやかな西欧文化の花々を、全国のうら若い少女に、とどけよとばかりに清き河面に浮かべた作家であつた。円本時代を迎え、新潮社の「現代小説全集」の一卷の印税をもとに、かの作家が憧れの国フランスへの旅路にあつた時、日本橋区若松町の、わが国における手芸専門店の先駆である三瀬商店では、一冊一円の円本をまねた、手芸の叢書を刊行する準備がととのえられていた。三瀬商店とは、碁の神様と謳われた兄・憲作を含めた瀬越三兄弟が「三瀬」と名づけ始めた店であつた。西欧手芸の流行に合わせ、手芸材料を専門に扱っていたこの店で、池田兵三郎商店のリリーヤーンも手芸用糸として大量に販売されていたのである。

リリーヤーンは、はじめ何に用いられる糸かわからずに作り出されたものの、そのふっくらした光沢のあるしなやかさは、マクラメレースの材料として盛んに用いられるようになっていく。こ

のような背景には、三瀬商店や手芸の先生方との連携が勿論考えられよう。三瀬商店が欧風手芸を紹介するわが国で初めての叢書『現代婦人手芸全集』を刊行し、手芸への案内・普及を試みたのは、その誠実で丁寧な営利をはなれた本作りとはいえ、手芸用品の売上げへの意図が全くなかったとはいえないであろう。

さてこの『現代婦人手芸全集』は、第一巻クレープペーパー篇（竜野都代子）、第三巻マクラメレース篇（河野富子）、第五巻毛糸編物篇（石藤寿子）、第六巻欧風刺繍篇（山脇敏子）の四冊しか、もとの本を確かめることができなかつたが、それらは昭和三年四月から、三瀬商店出版部、発行者瀬越喜作の名で刊行されている。そして第三巻マクラメレース篇を見ると、リリーヤーンがマクラメレースの材料として大いに用いられているのを発見することができる。このマクラメレースは、手芸玩具のリリヤーンとも関係が深いと思われるので、その本の序文を紹介して詳しくふれてみたいと思う。

著者河野富子氏は、マクラメレースがアラビアの昔に起源をもち、布地の縁を結んで飾りとした事から始まったとまず紹介している。次に「私は曾て英国に居た頃此のマクラメレースに注意を惹かれ、適當なる参考書を得て帰朝致し、爾來種々研究工夫を重ねつつ今日に及びましたが、此の度三瀬商店の婦人手芸全集発行

の美挙を賞し、不肖私が筆を執つて自分の考案になる数十種のものを幾方の姉妹方に発表する機会を得ました事を深く喜ぶと同時に、読者諸姉が尚ほ一層の研究を積まれて最も勝れたる多くの製品を得られんことを切望する次第でございます。」と執筆の挨拶をしている。

そうして本文のはじめにおいて、マクラメレースに用いる糸は、「打紐の様な感じのする太い糸で、而もあまり撚の強くない柔かみをもっている糸」がよいとして、たとえば太い麻糸、加工綿糸の撚糸、太白絹糸、人造絹糸の撚糸、リリーヤーン、ピロード糸、毛糸を例に掲げている。しかし「リ、ーヤーンは廉価で得るに容易く色数も沢山で自由に撰ぶことが出来ますから最も重宝で御座いませう。」とリリーヤーンを特に推奨しており、マクラメレースはリリーヤーンに限るような観を呈してゆく時代の前兆をうかがわせている。

マクラメレースは編んでいくのに用具の準備がいくらか必要で、まず編用を用意して、レースピンで糸を固定しながら編んでいく。その点が、釘に糸をかけて編むおもちやのリリヤーンと似通っている。従つて、リリヤーンのおもちやの商品化についても、もしや三瀬商店が大きく関連しているのではないかと想像された。しかし、三瀬商店はその後、全集の刊行がたたり、経営が苦しく

なって倒産してしまっている。池田さんの話によると、丸武商店と名をかえ、債権者から逃れながら本は出したが、丸武商店もいつかなくなってしまうという。ここで、三瀬商店の関係者をたどる糸はブツツリ切れてしまった。

やがて無駄とは知りながら、瀬越という珍らしい名をかすかたよりもして、私の指は電話帳を繰っていた。そこに見い出されたのは東京でただ一人の瀬越姓——瀬越一治氏であった。失礼をも省みずお電話すると、ああ、瀬越憲作氏の長男の家という。

そしてそこから瀬越喜作氏が御健在であることを知った。宙にそよぎ舞った糸の緒を再びつかんだ心地がした。謎よ、どうか解けると祈る思いで瀬越喜作氏にお電話すると、氏は八十三歳の高齢、腰を悪くして十四年間も臥せっていらっしやるとのこと。用件をお伝えすると、取継の方も親切に伝えて下さったとみえ、ベッドの傍の電話の受話機を執って下され、寝ながらに、お話をし下された。老翁のおだやかなやさしい声が、胸に沁み透るかのように伝わってきた。

喜作氏のお話はまとめると次のようになる。

『現代婦人手芸全集』は全七冊で、本屋では売らずに、全国に手芸愛好者の会員を募り、会員三万五千人の人達に対して、毎月一

冊ずつ発行して送った。マクラメレース篇により、リリーヤーンは大いに売れ、池田兵三郎商店は大あたりをとった。この兵三郎氏はなかなかの人格者で、私はよくお世話になった。

子どもが使うニッチングは、大正末から昭和のはじめにかけ、三瀬商店で売っていた。しかし誰が考案したものか知らない。下町の木工所の職人が店にもってきたのを売った。ニッチングは当時、全国の手芸材料店で何十万個と売られていた。大・中・小の三種類の大きさがあり、棒が中空になったものに真鍮の針が五本、十本と打ちつけられた簡単なものだった。これにリリーヤーンをひっかけ、牛骨や竹でできた糸の編針で編んでいく。

三瀬とならび、東京には手芸材料店としては古くからもう一軒、出口佐市商店というのがあったが、その店でもニッチングを盛んに売っていた。

河野さんがマクラメといっしょに英国からもってきたものではないと思う。日本で作られたおもちゃではないだろうか。

瀬越さんは、ニッチングはあの時だけ流行^{はや}って、今ではもうなくなっているのではないかと言われる。手芸店で扱っていたが、それがいつのまにか、おもちゃ屋扱いになったことを知らないでいたらしい。瀬越さんはその後、シルバー編機の会社を創設さ

れ、実業家として華々しい活躍をされたようだ。池田さんはそれを御存知なかったというわけである。

さて、洋行帰りの河野富子氏はリリーヤーンを使って、帯止め、ネクタイ、ショール、バラソル、栗、タセルス(飾り房)、飾りボタン、マクラメ人形、クッションカバー、テーブルセンター、ランブシェード、壁掛などの作り方を紹介している。まさに洋服に似つかわしい装身具、また応接間を飾るのにふさわしい品々である。当時の婦人たちにとって、家居がちなる日々に、絨毯が敷かれ、ピアノが置かれた広間で、マクラメレースに勢を出すことは、どんなにか異国の香気をかぐことであつたらうか。「マクラメ」というフランス語は、心うち震える不思議の四音節にはちがいがなかつたであろう。

◆糸巻

昭和初期に子ども時代を過ぎた方が、友だちとの幼気な喧嘩で「あなたのうち、応接間がないじゃないの」とやり、それを耳にされたお母さまにいたくたしなめられた思い出を語られた。洋風文化を我家に導き入れていたのは、子ども心にも得意気なこ

とだったのが惚ばれるが、当時、応接間のある文化住宅のほか、文化鍋、文化包丁、文化刺繍と、「文化」の名のもとに、洗練された美をもち、それに加えて機能的にも優れているとされた品々が、中流の家庭の中に多く取り込まれていた。まさに「文化」の名こそは、人々の中流意識を刺戟するものだったらしい。

文化刺繍は、欧州で創始され、アメリカに渡り、大衆手芸として行なわれていたものだが、昭和の初期に藤崎豊治がわが国に伝え、広く普及に努めた。この文化刺繍に用いる糸は文化ヤーンと称し、やはり当時多く出回っていたリリーヤーンを用いた。リリーヤーンをほぐすと、メリヤス編みの縮みがあつて弾力性に富んだ糸となる。この糸の縮みを利用して、これ又文化刺繍針という特殊な刺繍針で布地の上から刺したり抜いたりして刺繍をしている。比較的単純な動作で、フランス刺繍などより速く作品ができるため、今に至るまで長く人々に愛されてきている手芸である。マクラメレースがリリーヤーンで作られる流行が過ぎても、文化刺繍はこのリリーヤーンの糸でしかできないこともあり、リリーヤーンの全生産の三十%が、文化刺繍用の糸になっている。玩具のリリヤーンと文化ヤーンの糸を比べると、おもちゃ用は二百番手で目が荒く目方も軽く、それに対して手芸用は、目がまつて二百五十番手だという。また色数も文化ヤーンは四十色と多

くなっている。

尚、リリーヤンの名称は池田兵三郎商店一社の商品名であったが、あまりに広く名が通ってしまった為、昭和二十五年から池田氏の諒解のもと業界の統一商品名として用いることになった。

さておもちゃのリリヤンが、マクラメレースと深いつながりがあることは、この製品がそのはじめ、手芸材料店を通して売られ、後になって、おもちゃ屋で売られたことから推察される。又、「ニッチング」と呼ぶことから、私には日本で創り出された

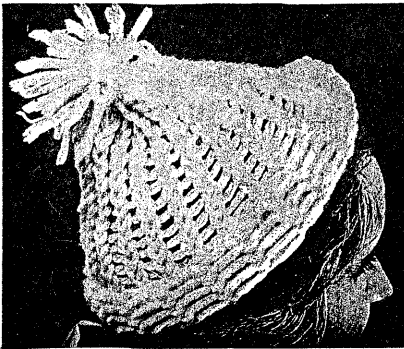
ものとは思われにくく、やはり、英国あたりから手芸（特にマクラメレース）と共に入ってきたのではないかと考えられた。そこで何はともあれ、次はイギリスのマクラメに関する本を調べてみることにした。そして見つけた一冊の本に、次のような帽子の作品例が載っていたのだ。

著者A・N・ピルシャーさんは、この帽子を図のようなワクを用いて編むと紹介しており、それは全くリリヤンそのもので、ただ毛糸で円く大きく編んでいくにすぎない。そして著者は、この作品の作り方の説明に先だち、「これは、子どもの時によく遊んだ、木綿糸の糸巻に四本のツメを打ちつけたものの応用である。それはまたヘドリー・ダウン・ザ・リール (Dolly Down The

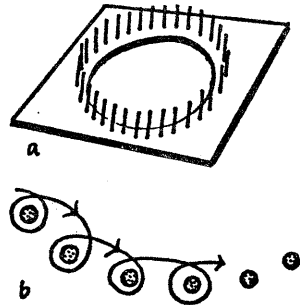
Reel) の名で知られている。」と書いている。

マクラメの本の中に、リリヤンのおもちゃを応用したこの帽子を発見したときの驚きそして嬉しさよ——（読者の方よ、御想像あれ！）

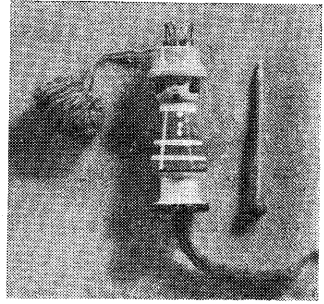
そこでイギリスのケンブリッジに在住している知人長島淑子さんに手紙を書き、そのドリー・ダウン・ザ・リールがどのようなもので、今でも子どもたちに遊ばれているのかどうかなど、おもちゃ屋を廻り、英国の婦人の方にも尋ねてくれるよう面倒な探索を頼みこんだ。その返事による



〈フレンチ・ニッチング〉ハット



〈フレンチ・ニッチング〉フレームと毛糸のかけ方



イギリスで〈Knitter〉、
〈Knitting Dolly〉、〈Knitting
Nancy〉と呼ばれている
おもちゃ。

と、おもちゃ屋で〈Knitter〉、〈Knitting Dolly〉、〈Knitting Nancy〉と呼ばれて、四本のツメが打ちつけられた、人形の形をしたものが売られているということであった。これで〈Dolly〉は、握り手が人形になっているところからつけられた名とわかった。尋ねた人の中では〈Dolly Down The Road〉という呼び方は知らないということであったが、イギリスでも各地方により、いろいろな名前がつけられていると推測される。

また長島さんの報告によると、手芸品店の女店員（四〇歳台）の人や、二十八歳の女の友人が、昔、子どもの頃、お店で買わずに、木の糸巻に釘を打ちつけて作り、編んだ記憶があると話していたことを伝えていた。

ビルンジャーさんは、帽子を編むワクを「フレンチ・ニットイン

グ・フレーム」と呼び、その道具によって編み上げた帽子を「フレンチ・ニットイング・ハット」と呼んでいるところから、マクラメの手芸がフランスからイギリスにもたらされたように、この遊びもフランス起源かもしれないと思われ、そのことも尋ねてもらった。すると〈Knitting Dolly〉をフレンチニットイングと呼ぶが、フランスからきたものかどうかはわからない、ただそう呼ぶという答えが返ってきたという。

以上のように起源がどこの国のものかはわかりかねるが、イギリスにおいてそのはじまりは、糸巻に釘を打ちつけ、先のがった木の棒を編み針として、毛糸をかけて編んでいたのである。この英国にあった糸巻のおもちゃ〈Knitter〉をもち帰り商品化したのは誰だったのであろうか。謎はあくまで神祕の輪をめぐらし、謎として残った。

日本保育学会第33回大会

期日 昭和55年5月17日(土)、18日(日)

会場 西南女学院短期大学

連絡先 北九州市小倉北区井堀一―三―二

西南女学院短期大学